

みなとみらいで牛と触れ合い ～かながわミルクフェスティバル～

神奈川県酪農と乳業について県民に理解を深めてもらおうと、「かながわミルクフェスティバル 2015」（主催：かながわ酪農活性化対策委員会、（一社）神奈川県畜産振興会）が、10月3日、横浜・みなとみらい地区の日本丸メモリアルパークで催された。

横浜市内の南相澤良牧場からやってきた乳牛の親子の姿に、「大きい」「かわいい」と多くの来場者が立ち止まり、子牛をなでたり、日本丸や高層ビルを背景に親牛と一緒に記念撮影をするなど、乳牛とのふれあいを楽しんでた。県内酪農家、乳業メーカー各社、県や酪農・畜産関係団体などが集結した会場では、県内の牛乳工場生産された牛乳の試飲や、複数メーカーの牛乳を飲み比べる「牛乳ソムリエ」、県産和牛「生粋かながわ牛」の試食、牛乳パックを使った工作やゲーム、県酪農や乳業に関するクイズラリー、牛乳製造過程のDVD放映などが行われ、大勢の親子連れで賑わった。

現在、県内では200戸の酪農家が約7000頭の乳牛を飼養しており、年間約4万トンの生乳が生産されている。また、県内には、乳業メーカーの牛乳工場が8ヶ所あり、年間約29万トンの牛乳が製



みなとみらいと乳牛の組み合わせが、強いインパクトを与えていた

造されている。生乳の処理量は北海道に次ぐ全国第二位の規模で、約800万人分にあたる。

県内酪農や乳業が神奈川県の学校給食へ果たす役割は大きく、年間約2万トンの県産生乳が学校給食用に供給されており、「子ども達の成長に必要なカルシウムを円滑に供給する使命を担っている（神奈川県乳業協会・近藤精一郎会長談）」。

神奈川県酪農協同組合連合会の石井重満会長は、横浜が会場に選ばれた理由について、「日本で初めてアイスクリームが販売されたのも、牛乳製造販売業が行われたのも近代酪農発祥の地・横浜。乳業工場と酪農家のつながりも強く、この場所での開催は意義深い。人の流れが多い都市の中で、神奈川県の酪農や乳業についてPRする事は、消費者の県酪農に対する理解を深め、県産乳製品のファン獲得につながる」と説明。「日本丸と乳牛の組み合わせは、来場者に強いインパクトを与えたのでは。実際に乳牛を見て、県内酪農について知って、県産牛乳・乳製品を日々の暮らしの中で愛用してもらえれば。多くの消費者が喜ぶ様子は、酪農家にとってもモチベーションが高まったと思う」と話した。



乳牛ふれあいコーナーは、たくさん子ども達でにぎわった



「牛乳ソムリエ」コーナーで、複数メーカーの牛乳を飲み比べる参加者達